貿易アリ」と云へり。

此の記事によるに港と名くべき價値なし。然れどもこの背後僅二、三十キロメートルを隔つる公館墟に支那第一と稱せらるゝ良質の油頁岩層[37]あり。埋藏量明かならざれども一億噸を超え更に北東方羊角墟に到達せるものゝ如く附近を精測せば恐くは十數億噸の埋藏あるべし。品質は最優良なるは三〇ペルセントを超え平均を二〇ペルセントとなせり。

これが搬出には絶對的に海港を要す。現地乾餾[38]たると礦石搬出たるとを問はず相當の施設をなさゞるべからず。水東港は最も近き海岸なり。更に遠距離を忍べば電白港あり。やゝ遠距離なれども水東に比さば港灣としては優良なり。南支那海水路誌第二卷(六五頁)によるに

「電白港北緯二十一度三十分、東經一百十度十五分。港口ハ當港西部ヨリ南方ニ擴延セル三角形沙堆トラムタウ半島ノ北西端トノ間ニ在リテ幅約〇・三浬ヲ有ス。河ニ到ル水道ハ干出スル平洲ノ間ヲ通ジ、水深五乃至二・½尋(九・一乃至四・六米)ニシテ、砲臺ニ面スル河口ニ於テハ二尋(三・七米)ヲ有ス。

電白ハ入江ノ東方ナル淺水開灣ノ灣首ニ位ス。而シテ端舟ハ港口ヨリ廣キ平洲ヲ貫ケル溪流ヲ通ジテ高潮時ニ於テノミ其處ニ到達スルヲ得。當地ハ支那南岸ニ於ケル主要ナル鹽產港ナリ」と云へり。

電白も決して良好と云ふべからざるも水東に比さばやゝ佳なるが如し。將來十分の精測を經、油頁岩搬出の海港を定めざるべからず。高雄より電白に至る五一〇浬。潮はやゝ大にして大潮升二・六メートル、小潮升一・九メートルとす。

十四、龍　門　港

此の地名は十一月中旬の我軍上陸により邦人にその名を知らるゝに至れり。故に今その概位を示さず。

雷州半島より安南國境に到る區間は唯北海の一港のみ開港場として存在せり。其他は概ね未測なり。北海も極めて不良なる港灣にして西南方の要港たらしむる價値を全く有せず。故に不肖の將來計畫よりは削除し之に代ふるに龍門を以てす。

龍門は欽州に通じ而して東北行すれば大欽江により靈山に出で西江の本流の南郷に通じ、西北行すれば低き山嶺を踰え直ちに南寧に至り、西行すればやゝ急嶮なる嶺を踰ゆれば廣西の上恩、思樂、明江を經て安南國境の鎭南關に出づ。極西南部に於ては最重要の地なり。

將來には龍門を以て海港となさば北海の稅關を是に移し、青島と同等の設備をなさゞるべからず。現在にては全く無設備なり。上陸せし我軍も恐くは各種の困難に遭遇せしならん。南支那海水路誌第一卷(三六〇頁)によるに

「龍門江。チアオタント其ノ東方十七浬ナル高サ六五呎(一九・八米)ツイムイチヤオ嶼トノ間ハ龍門江口ヲ成シ、其ノ幅約一〇浬ニシテ無數ノ淺堆ニ塞ガレ其ノ間ニ數狹水道アリ。安全ナル好錨地ハ門洲ヲ越ヘテ約十二浬ノ處龍門ノ對面直下ニ得ラルベク、水深四乃至五尋(七・三乃至九・一米)アリ。門洲ハチヤオタンノ東方約六・五浬ニ亘リ約〇・五浬ノ幅ニ於テ水深約十二呎(三・七米)アリ。

該江ヘハ當地方ニ精通スルモノニ非ラザレバ入進ヲ企ツベカラズ。何等ノ針路法無シ。」と云へり。

この記事よりするも極めて不精測なるを知る。海軍水路部海圖第七〇九號(祕密圖に非らず)を見るも甚だ不精測にして此の記事を圖載せるに過ぎず。不肖の有する支那版の陸圖も極めて不精測なり。日本版は本より然り。

恐くは我軍の上陸作戰に當り帝國海軍は異常の困難をなせしならんと信ず。然れども上陸は成功せり。作戰は順調なるを以て知るに龍門江の門洲は決して我軍を阻むが如き淺所のみに非らざるを知る。

如此き廣濶なる地域の門洲は全面に淺きか、或は所々に澪を作るかの二種ありと雖も、澪は必ず大小、廣狹、淺深を問はず存在す。滿洲帝國の鴨綠江口より朝鮮大同江口に至るの間は一般に淺しと雖も無數の澪を生ぜり。

龍門江も恐らく幾多の澪あるべし。この澪中の最深を更に浚渫し最低潮面七メートルまで疏通せば當分は支障せざるべく、更に後方の發達に伴ひ一〇メートルまで漸を逐ひ浚渫せば可なり。築港は龍門に於て之を行はゞ可なれどもこの附近の圖を得ざるを以て案を定め難し。他日水路部が新版を出版する期に於て計畫を立つべし。今回の南寧攻略は事變掉尾[39]の活躍にして是を以て有終の美を完うするを得べし。

南寧より西方の地區は我邦人の全く知らざる地域にして、地味の豐沃と物産の多きは西江流域中第一なり。況んや雲南、貴州に通ずる要衝たるをや。本書第二卷(八三―八五頁)を見るべし。我邦人に警告するは自から知らざるを以て此地方を輕視すべからず。

十五、清　瀾

十六、新　英

十七、楡　林

是れ等は皆海南島の諸港なり。本書第二卷「海南島開發計畫」全部を通讀すべし。

北主南從主義を駁す

結論するに支那の港灣は一として現狀のまゝにて利用せらるゝものなし。强て云はゞ青島のみやゝ良好なり。然れどもその設備は依然不十分なり。況んや他をや。故に大連、上海(牛浦)、高雄の三港を第一に完備せしめ而して漸次緩急に應じ工を計らざるべからず。

港灣に關して我邦人に警告すべきは北主南從の誤れる感念を一掃すべきにあり。この謬想は東亞の新建設に大障害を來せり。物は南に豐かに北に乏し。單に礦物のみを以て富源を論ずべからず。石炭は北に多しと雖も、他は南に多し。石炭の用は熱源、動力源なり。その效用大なりと雖も是を以て全部を掩蔽すべからず。南方の物產は各種各樣にして皆港灣により集散す。是れが開發によらずんば東亞の新建設は決して之を行ふ能はざるなり。

夫れ物の乏しきは貧なり。物の豐かなるは富なり。富を捨て貧を取り而して新建設を行はんとす。何ぞその難きを求むるや。故に不肖は斷じて北主南從主義[40]を一括して謬想なりと云ふ。

昭和十四年十二月二日

東京に於て

註解

ここに難解字句人名地名等に關して註解を附しましたがこれは勿論著者の關せざる所でありますから豫め御了承下さい。

「自序」の註

(1)軒　轅　支那古代の帝王黃帝の名史記に出づ。

(2)文質炳煥　外觀の美と實質とが光りかゞやくこと。

(3)氣序變和　氣候がやはらぎて程よきこと。

(4)唐水、殷旱　唐代の水害殷代の旱魃のこと。

(5)漠　ゴビ沙漠を言ふ。

(6)身毒安息　身毒は今の印度、太古印度阿利亞族が西方より移住した信度(インダス)河邊の國の意。インドは其の轉訛である。安息は西域にあつた安息國。即ちパルチア國のことである。エウフラテス、裏海、アラビヤ海の間にあつた。

(7)李世民　唐高祖の二子、秦王に封ぜられ後卽位して太宗と言ふ。

(8)戒日王　印度ウドヤニー烏萇國の王、佛教を興隆し文學技藝を奬勵し、其の

號令は殆ど全印度に及んだ。西紀七世紀頃、唐の盛んなるを聞き使を遣はして朝聘した。

(9) 冀　南冀州の南方、冀は今の直隷、山西及江河以北遼河以西の地を言ふ。

(10) 鐵木眞　元の太祖、成思汗のこと。

(11) 白　蠻白族のこと。

(12) 朱元璋　始め濠洲(安徽省鳳縣)の僧、元の末葉に郭子興と共に兵を起し、江東の地を略し、都を金陵に定め國を吳と稱した。然るに當時元廷內訌頻りであつたから元璋は之に乘じて兵を進め元の大都に迫り、順帝を追ひ、皇陵に卽位して國を明と言つた。卽ち明の太祖のことである。西紀一三六八年。

(13) 奴兒哈赤　Nurhachu 愛親覺羅氏の太祖、西紀一五八三年滿洲に起り、父祖の仇なる尼堪外蘭を滅ぼし、滿洲の諸部を統一し、蒙古を懷柔し、一六一六年自立して王となる。

(14) 弩末魯縞を穿つ能はず　弩は力強き石弓又は大弓。魯縞は魯の國曲阜あたりより產する薄く細き絹。卽ち至つて強きものも其勢衰へては何事もなす事の出來ぬと言ふ意。

(15) 鼎　革　王者の易き革命を言ふ。鼎は易卦に於て新を取り、革は故を去るの義。

(16) 庶頑讒說　從はぬ人民が惡口を言ふ。

(17) 烝　民　おほくの民、蒼生、黎民に同じ。

(18) 逋　逃罪をのがれること、又其の人。

(19) 虎　賁　勇士のこと、賁は奔虎の如くはしる義、もと帝王を護衛した周代の官名。後世獰猛なる軍隊の意に用ふ。

(20) 桓　桓　强く武勇ある樣。詩經に桓武王保有厥土とある。

(21) 倒懸の苦　手足を縛つて倒に懸けられる非常な苦を言ふ。孟子公孫丑、上篇

に「當二今之時一萬乘之國行二仁政一、民之悦レ之猶レ解二倒懸一也」とある。

(22)聖謨宏宏　天子の御はかりごとの廣大なること。

(23)杜　塞　ふさぎとぢること。

(24)畎　澮田の間のみぞを言ふ。

(25)伯　益　舜の時處に任ぜられて山澤の事を掌りて功あり、よりて舜之に嬴の姓を賜ふ、其の子孫は秦に住し、皇帝の位に卽いた。

(26)禹　鯀の子。堯舜の時大洪水あり、鯀是を治めて功なく爲めに誅せられ、禹父に代りて道を通じ、川を決し、九州を劃し、貢賦の制を定め終に舜に代りて政を攝し、舜の崩後其の讓を受けて天子となり、夏后氏と稱した。

(27)蓬　蒿　蓬蒿よもぎ等のしげみ。いやしきことに喩ふ。

第十四篇「近海航運港灣計畫」の註

(1)補　綴(てい)　おぎなひつゞる。非常な急に際して一時しのぎの間に合せにした意味。

(2)訕(そしり)　音はサン又はセン、訕謗又は訕笑の語あり。

(3)門　洲　門はサン又はセン、くわんぬき、門を閉ぎす横の棒を言ふ。卽ちここでは大沽の港をとざしてゐる洲を言ふ。

(4)テンダー　英語tender, 附屬船のこと、又炭水車。

(5)澪(れい)　みを、水路のこと。

(6)潮(てう)　汐(せき)　みちしほとひきしほ、又は朝しほと夕しほ。

(7)澪　線　水路の線(5)を見よ。

(8)スラバヤ　Soerabaja ジヤバ東部北岸にある大港市、開放港であるが前面にマ

ドウラ島ありて風浪をふせぎ良港である。歐印、濠、支、日等と定期航路を通ず。

(9)駿　よき馬、すみやかに走る馬。

(10)北東信風　北東の風を信風と言ふ(既出)

(11)苹果　林檎のこと。

(12)鳳梨　パインアツプル。

(13)凌波性　波をしのぎたへる力、輕くすゝむ性質。

(14)進勦　進み擊つて敵をほろぼすこと。

(15)僑華　華は中華、僑はかりずまひ、卽ち海外に居留する支那人、多く商人として大きな勢力を持つてゐる。

(16)翕然　あつまる樣。

(17)宇内　天下。

(18)膠柱の悔　柱はことぢ、卽ちことぢににかはをつけて琴をひく樣な、融通のきかない悔。

(19)包彎　ゆみなりにつゝむこと。

(20)驥駿騠狗　驥、よきうま、駿はやき馬、騠狗はつよき犬、小犬。

(21)哨海　海のみはり。

(22)荷艙　艙は船倉、船中で荷物ををさめる所。

(23)端舟　端艇、短艇に同じくボートのこと。

(24)美酒佳殽　美はしき酒、おいしい肴。殽は肴に同じ。

(25)誚せめる、しかるの意。

(26)江湖　世の中、世間の意。

(27)比埒　埒はひとし、同等の意。卽ち同等の廣さを持つ意。

(28)不凍港　一年中凍らぬ港。

(29) 童山濯々たる地　童山ははげ山，濯々は山に草木なき様，卽ち草木なきはげ山の地。

(30) 倨傲尊大　たかぶりおごり威張ること。

(31) 盡　頭　端（既出）

(32) 蕭　條　ものさびしきさま。

(33) 蘆　船　はしけ（既出）

(34) 瞠　若　おどろいて目をみはること。

(35) ライアス狀　海岸型の一種，侵蝕された山地が海水面の變化の爲に海水の浸入を受け複雜な海岸線をなしてゐるものをいふ。深く入り込んで口が廣く海に開いてゐるのが常である。リアスとも言ふ。リヒトフォーヘンが用ひ初めた。原語は Rias coast, Riaskiste である。

(36) 盡　端　(31)に同じ。

(37) 油頁岩　油母頁岩に同じ，油母を含有する頁岩を言ふ。英語にて oil shale と言ふ。

(38) 乾　餾　物質の精製法の一種，あるものを分解點以上に熱して，溫度の相違により種々の精製物を生ぜしめる法。

(39) 掉　尾　最後のめざましい活動を言ふ。タウビと讀むは慣用で正確にはテウビである。

(40) 北主南從主義　北方が第一で南方が第二であるとする主義。

著者檢印

昭和十四年十二月二十五日印刷
昭和十四年十二月二十八日發行

定價金壹圓參拾錢

著者　大谷光瑞　京都市伏見區桃山三夜莊
發行者　村田鐵三郎　東京市麹町區丸ノ内三ノ八
印刷者　北川武之輔　東京市京橋區銀座四ノ四

發行所　大乘社　大阪市東區本町四丁目津村別院内
有光社　東京市麹町區丸ノ内三ノ八　電話丸ノ内三〇二〇番　振替東京六六一五番

大谷光瑞興亞計畫奥附

大谷光瑞先生二大名著

臺灣島之現在

南方日本の生命線たる臺灣寶土の一大研究書

著者曰く「小なりと雖も臺灣は日本に於ける唯一の熱帶產業地だ。その全產物は厖大なる滿洲國のそれに匹敵し、此地を活用すると否とは國富に及ぼす影響年額凡そ十數億を算する。これ決して余の豪語に非ずして事實が之を證明する」と。

內容目次の一部

臺灣の農作物—果實—澱粉植物—染料植物—タンニン—纖維植物—香料植物—藥用植物—その他

臺灣の林業—樟腦—チイク—マホガニイ—紫檀—その他

臺灣の畜產—水牛—シンド種—ギル種—マイルソル—その他

臺灣の鑛業—石油—金—銅—石炭—その他以上の外工業、交通、觀光、氣象等一切を網羅す

定價金拾圓

送料 市內六錢 內地二十四錢 植民地四十七錢

菊判 八百三十頁

附圖口繪 百五十葉

表紙背革天金

金文字入函入

支那の將來と我帝國の使命

現下時局の最高指導書として識者及爲政者を驚歎せしめた問題の快著！

過去十數年來絕えず對支强硬外交を稱へ來つた大谷光瑞先生は、日支事變の勃發するや直ちにその蘊蓄を傾けて吾が日本帝國の進む可き道を明かにすべく、萬腔の赤誠をこめて本書を公にされた。支那に居住し、支那そのものを研究すること幾十年、而もその烱眼は支那全土の表裏に徹し、こゝに群少凡百の徒を壓して堂々たる所見を披瀝された。今や本書は當路大官を注目せしめ全國民に難局打開の道を說く最高の指導書として嘖々たる好評を博しつゝあり。而も時局益重大、東亞の天地に暗雲低迷愈々濃くならんとする時、本書の眞價まことに燦然たるものあらん。

定價金壹圓

送料 市內六錢 內地十二錢

四六判 三百五十頁

本文 五號活字

表紙オフセット美本

大谷光瑞全集

全十三卷 定價各冊金壹圓八拾錢 送料市內六錢 內地十六錢 **裝幀** 四六判五百五十頁 本文九ポ總ルビ附 絹表紙金文字入 岡田三郎助畫伯裝幀

淨土三部經	大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經は、淨土眞宗の根本聖典にして、梵、漢、和、英の四ケ國語を對比して、懇切明快に講述し、何人にもその奧義を會得せしむる一大名著にして嘖たる好評を博せるもの。
三經篇	本篇收錄の妙法蓮華經講話は、學徒としての猊下の眞面目を發揮せる名講話にして夙に佛教學者をして驚歎せしめ、維摩經講話は、これ又豪僧維摩の全貌を彷彿せしめる獨得の名調子。
般若涅槃經	熱烈なる學究的良心を以て、悉く梵語の原典にして眞僞をたしかめ、釋尊晚年の相貌に最も獨創的なる批判を交へて論述するところ、到底凡百の學徒の企圖し得ざる快著なり。
現世未來利益篇	無量光安樂莊嚴經は、これ卽ち佛陀が西方安樂國土の全貌を物語る經典にして、後生大事の根本義を闡明せるものなり。附錄の金光明最勝帝王經講話は降魔の寶劍にて逆賊に向ふ烈日の氣魄を示すもの。
信樂篇	若き日の猊下が「一世の蘊蓄を傾け、不退轉の覺悟を示して執筆せる「見眞大師」の一篇こそ、いやしくも佛門にある者の斷じて見逃すべからざる名著である。淨土眞宗の精髓として敢て江湖の御淸鑑を乞ふ。
教義篇	從來諸說紛々たる「王舍城所說無量壽經」及び「舍衞國所說無量壽經」に對して、その該博なる智識を傾けて徹底的に比較研究されたる佛教學徒の啓蒙資料として高名なり。

大谷光瑞全集

孫子新註 附無題錄	支那古代の名著「孫子」に對して、猊下獨自の新解釋を下せるもの。而も兵法に借りて處世の大道を明示せる高邁なる識見は、之を聽くもの千金の價値あり。「無題錄」はこれ日本國民に對する一大警告の名文。
食・花・支那古陶瓷	多角型的なる才能に、多方面なる趣味。而もその飽迄科學的なること師の如きは稀有の存在なり。本篇に收むる食・花・支那古陶瓷を一讀すれば、何人もその陸離たる光彩に驚歎するであらう。
漫筆篇	猊下の足跡は洋の東西に亙り、軒昂たる覇氣と俊敏なる洞察力を以て、產業開拓のために轉々放浪すること幾星霜。本書はこの足跡を記して綴れる一篇の好文學にして興趣無限。
支那問題	看よ！既に十數年前に日支衝突の避くべからざる所以を豫言せる猊下が、憂國の赤誠を吐露せる一代の名論にして、豪壯なる筆致、秋霜の概、野人光瑞の眞面目を發揮せる快著である。
大經義疏	大無量壽經義疏は猊下の、數多き御著作中、最も意義深きものにして、淨土眞宗の根本聖典に磐石の重きを加へたるもの。「附錄の「能斷金剛般若波羅蜜多經講話」と共に御淸讀を乞ふ。
隨筆集	折にふれ、機に應じ、悠々自適の中に炯眼博識を筆に託す。月、雪、花、雲霞、飛煙、天地有情を紙上に漂はせて、名文家としての猊下を識るに絕好の資料なり。
淨土論註	「淨土論註」は曇鸞大師が往生論を詳解されたるものにて、宗祖親鸞又之に甚信され給ふ。光瑞猊下舊稿に幾多の大改訂を加へ、萬全を期して本全集に收む。以てその眞價を窮知し得べし。

大谷家藏版

新西域記

世界學界の翹望を擔ひ 初めて空前の名著出版さる

それ西域は遠く佛教興隆し、三寶流通せるの故地、特に新疆の地たるや、印度と支那の通路に當り、兩大陸文化の接觸せし處にして、同時に又佛教東漸の一大衝衢たり。啻に佛教隆興の地たる點に於てのみならず、其歷史的竝に地理的關係に於て、我邦は彼地とは特殊密接の關係にあり。

前西本願寺法主大谷光瑞師は深く此點に留意し或は人を派し、或は親しく此の地方を蹈査すること前後併せて三回、之を彼の泰西諸探檢家の所得に比すれば其質と量に於て遙かに彼等を凌駕し、その蹈査區域の廣大なること到底、法顯、玄奘等の企て及ばざるものあり。又之が探査に投ぜし費用の莫大なる、その探査發掘の精密周到なる、實に是れ世界的巨人たる大谷光瑞師にしてのみ爲し得る一大業績と云はざるべからず。

而も未だ此の世界的大探檢大調査の全收穫の上梓せられ居らざりしを遺憾とし、玆に大谷家竝に本願寺當局の協贊を得て細心愼重に計畫を樹て、最善を竭して苦心編纂すること實に年餘、今日遂に發刊を見るに至る。これ獨り佛教界の爲のみならず、實に考古學、東洋工藝美術、地理學、人類學上に裨益する所至大なりと信ずるものなり。敢て一大方諸賢の淸鑑を乞ひ奉る。

裝幀

四六倍判總頁一千四百頁
寫眞挿入六百餘葉
原色及コロタイプ百五十葉
表紙特製羊皮金文字及
金模樣三方マーブル函入

定價 上下 **金壹百五拾圓也**

印刷

永遠不滅の此の大著述を後世に傳へんが爲に、斯界の權威大日本印刷株式會社に囑して新五號活字全部を新鑄して最良インクを用ひたり。

製本

明治・大正・昭和を通じての大豪華版たらしむべく優秀なる製本工を配し、長時日を要して一冊一冊を入念に製本せる完璧品。

內容の一部

蒙古新疆旅行記　野村榮三郎
支那紀行　吉川小一郎
新疆通信抄　橘瑞超
中亞探檢　羽田亨
本願寺の發掘物　內藤湖南
タシュクルガン通信　渡邊哲信
ギルギット通信　本多惠隆
印度紀行　上原芳太郎
西藏入國記　青木文教
尼波羅通信　島地大等
孟買通信　藤井宣正
ビルマより雲南へ　前田德水

大谷光瑞興亞計畫

全十卷

各冊定價壹圓參拾錢
送料 市內六錢 內地九錢
四六判 約二百餘頁
紙裝美本

著者にして始めて成し得る大業績
興亞の黎明本書より出づ！

第一卷

第一篇　支那の將來に於ける施設
第二篇　支那治政の要諦
第三篇　支那新首都と海港
第四篇　錢塘江の水利
第五篇　淮河の水利

第一篇　支那の將來に於ける施設—(一)政綱(二)軍事(三)產業(四)財政(五)結論　**第二篇　支那治政の要諦**　**第三篇　支那新首都と海港**—(一)首都(二)海港(三)運河　**第四篇　錢塘江の水利**—(一)江口と暴漲潮(二)江身の改修(三)暴漲湍消滅(四)錢塘新江身と浙東一帶の水利(五)浙東の海港(六)結論　**第五篇　淮河の水利**—(一)淮河分注(二)北淮河(三)南淮河(四)洪澤湖以東の下注(五)北淮河以北水利(六)海州より揚子江に至る東運河(七)淮河と海港(八)連絡の運河(九)灌漑(十)結論

既刊

第二卷

第六篇　海南島開發計畫
第七篇　嶺南の水利
第八篇　廣東及珠江三角洲の水利

第六篇　海南島開發計畫—(一)政體及首都(二)海港(三)交通(四)產業(五)開發の順序(六)結論　**第七篇　嶺南の水利**—(一)西江(二)北江(三)東江(四)韓江(五)其他の諸水(六)結論　**第八篇　廣東及珠江三角洲の水利**—(一)廣東附近(二)虎門(三)三角洲の中部(四)金星門港港及び外方(五)西江の本流(六)膽江、青膽洋(七)結論

既刊

第三卷

第九篇　揚子江の水利
第十篇　黃河の水利並河北の水利

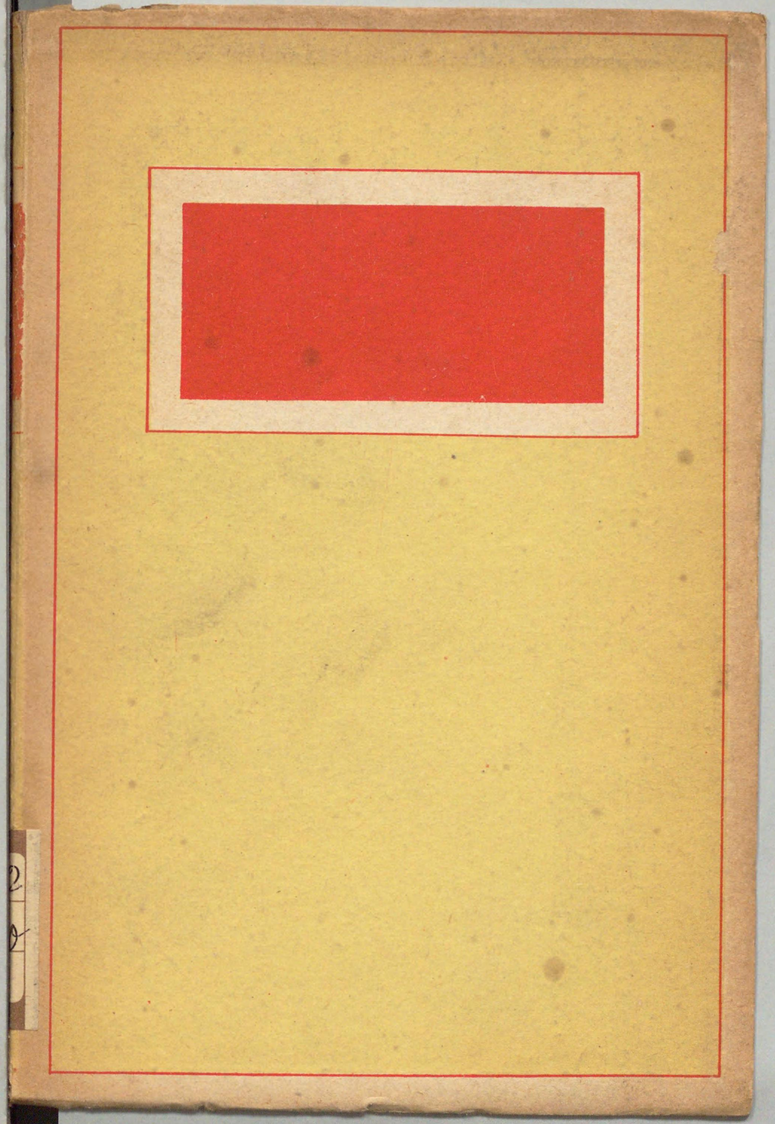
第九篇　揚子江の水利—(一)揚子江の水利、緒論1蕪湖より漢口に至る2漢口より宜昌に至る3宜昌より重慶に至る4重慶より叙州に至る5叙州より北緯二十八度に至る6北緯二十八度より巧家に至る7巧家より龍街に至る8龍街より金江に至る9金江より各吉に至る10各吉より碧油江に至る11碧油江より巴安に至る、結論(二)各支流の水利一、岷江(四川省)二、嘉陵江(四川省)三、黔江(貴州省)四、漢水(湖北省)五、湘江及沅江(湖南省)六、贛江(江西省)七、九江、蕪湖間の諸水(三)結論　**第十篇　黃河の水利並河北の水利**—(一)黃河の水利一、緒論二、河源より托克托に至る三、托克托より潼關に至る四、潼關より海に至る五、渭河六、結論(二)河北の水利一、緒論二、衞河、三、子牙河四、永定河五、灤河六、結論

既刊

第四卷

第十一篇　各省の水利
第十二篇　河江の航運
第十三篇　歐亞連絡鐵道計畫

第十一篇　各省の水利—一、福建省の水利二、浙江省の水利三、山東省の水利四、新疆省の水利五、甘肅省の水利六、雲南省の水利　**第十二篇　河江の航運**—一、緒論二、水利の重要性三、運河と航洋汽船四、航運船舶と諸設備五、結論　**第十三篇　歐亞連絡鐵道計畫**—一、支那の鐵道二、中部幹線三、北部幹線四、中北兩線合同以後に於ける本線五、南北連絡幹線六、雲南緬甸國境連絡支線

既刊

第五卷	第十四篇 近海航運港灣計畫	新刊	第十四篇 近海航運港灣計畫—一、海運、內國外國の別二、內國航路、地理的基點—客貨船航路三、外國航路、航路四、船舶、商船隊の常備—商船は高速ならざるべからず—特殊船舶—船型—十年の短計五、港灣、大港集中主義—大連港—上海港—高雄港—北主南從主義を駁す
第六卷	熱帶農業	續刊	（昭和十五年二月刊行）
第七卷	熱帶農業	續刊	（同　三月刊行）
第八卷	乾燥農業	續刊	（同　四月刊行）
第九卷	中支の産業	續刊	（同・　五月刊行）
第十卷	支那史跡解說	續刊	（同　六月刊行）